

詩とことば

*11月

阿部 公彦

「あの人、マイペースですね」という言い方がある。周りに合わせられない。身勝手。あまりいい印象ではない。でも、人は本来「マイペース」を持っている。固有の生命のリズムがある。むしろ、リズムを持たないときに不調や困難が生じ、人に迷惑をかける。

詩人は自分のリズムを知っている。そして、その乱れやぶつかりを鋭くとらえる。口語自由詩には形式がないと言われるが、だからこそ、各作品がリズムにこだわり、いわば固有の生命に手を伸ばそうとする。

実りの季節を迎え、詩集は充実している。日和聡子『砂文』（思潮社）は、冒頭の「旅唄」の強烈な一行目に引き込まれる。「神裂が叩く銅鑼を持ってついてまわった」。以降、「神裂」「銅鑼」という音が、心臓の鼓動のように響き続ける。ゴシック的な装置を得意とする日和だが、基にあるのは荘重なりズムの刻印。ほかの作品の「ら」「店」もいい。田原も着実な進行感のあ

マイペースの「乱れ」を鋭く

る詩人だが、『夢の蛇』（同）はヤマ場に仕組まれた小さな飛躍が心地良い目眩を仕掛ける。「その古い町を離れた後になって、不意に感じたのだ／私が通った狭く長いあの古い通りが／どうして龍でないと云えるだろうか」（「龍」）。「歌声」「瞬間の哲学」などにも注目。

蜂飼耳『顔をあらう水』（同）

は世界や日常を色や匂いに至るまでやわらかく受け止める感性を持つ詩集。「びょう、びょう」「鱗のある日」「リアリティー」では、そこをカクツ、カクツとつっぱりのようなものが横切ることでリズムのドラマが生まれるのがおもしろい。微妙な中断感を徹底的に引っ張り長編詩に結実させたのは高木敏次『私の男』（同）。現代の口語に、長歌のような古代的な陶醉の境地を生み出す。平田俊子『戯れ言の自由』（同）は軽妙なリズムを出発点にしつつ、そこに「戯れ言」がねばつくからむ。井上瑞貴『星々の冷却』（書肆侃侃房）もてきばきとした口調だが、あちこちで実にエレガントな一節に出くわし陶然とする。とくに「星々の冷却」がすばらしい。アイロニーが勝つように、言葉をじんわり暖める術を知っている詩人だ。

（東大准教授）